
熾火

須藤彦彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熾火

【Nコード】

N7187Y

【作者名】

須藤彦吉

【あらすじ】

「——そらさんとおっしやるのかな？」

図書館司書のそらに声を掛けてきた一人の老人。大怪我をするところを助けられたことで、そらと老人——草薙伊織は急速に打ち解けていく。

そんな中、そらと夫の喬生は、その母親の恋人が起こしたトラブルに巻き込まれてヤクザに喰い物にされそうになるが、その危機をまたしても草薙に救われる。だが、礼をしたいというそらに草薙は北陸の古都、金沢への同行と奇妙な頼みごとをするのだった。

「妻と別れる為に、私の後妻を演じて戴けないでしょうか？」

出会い 1

「——そらさん、とおっしゃるのかな？」

男の呼びかけにそらは顔を上げた。

レファレンスカウンターの前に立っていたのは和服姿の瘦身の老人だった。やや心もとない量の白髪を丁寧後ろに撫で付けて、同じ色の口ひげを申し訳程度に蓄えている。年季の入った指物職人をおわせる浅黒い顔の中でひととき目立つ厳しい眼差しは、若かりし頃の彼がさぞ苛烈な人物だったことを思わせるものだった。だが、目許に深く刻み込まれた皺がほんの少し垂れ下がっているせいで、その印象も幾分は和らいでいる。

「そうですけど——？」

そらは答えた。同時に眼鏡の蔓を手でつまんで持ち上げる。伶俐な顔立ちの彼女がやると取っつき難そうに見えるとよく注意されているが、長年の癖なのでなかなか直らない。

「漢字で？ それとも、ひらがな？」

「ひらがなです。最近は漢字の子も多いみたいですけどね」

「たとえば？」

そらは指で空中に”宙”という字を書いてみせた。他にも”蒼空”や”想良”などを書く場合もあるが、戸籍の字は基本的に何と読んでもいいので、極論を言えば”海”と書いて”そら”でも構わないことになる。

「わたしの頃は当て字は好まれなかったみたいです。普通に読めない字を当てられるよりは、ひらがなで良かったかなって思ってますけど」

「そのようですな。いや、いいお名前だ」

「いえ、そんな……」

愛想笑いを返しながら、そらはこの老人が何故、自分の名前の字面を不思議がったのだろうと訝った。

答えは胸元にぶら下がっている名札だ。そらがパートタイムで勤めている岡崎市立中央図書館の司書の名札は普通に漢字表記なのだが、併設の児童図書館が本来の部署である彼女の名札はひらがなでひぐちそら と表記してあるのだ。

「どうかなさいました？ お捜しの本でも？」

そらは自分の仕事を思い出したような顔で話を変えた。老人は少しだけバツの悪そうな笑みを浮かべた。

「実は新聞の縮刷版を見せて戴こうと思ったんですが、捜している年のものが書架から抜けていましてね。それで、どこにあるのか伺おうと思ひまして」

「それは申し訳ありません。いつのものを？」

「昭和57年の2月です」

老人は目当ての地方紙の1年分だけがなく、他の年のものは書架にあったと言った。

「だとすると、おそらく、どなたかがまとめて持っていていかれてるんでしょうね」

「なるほど、そうですか……」

老人の表情が曇った。

「縮刷版は貸し出しをされているんですか？」

「いえ、縮刷版は館内での閲覧のみで、貸し出しはお断りしております。ですから、そのうちに戻されるとは思いますが……」

新聞社がインターネットで過去の記事のデータベースを公開するようになってから、新聞の縮刷版を見るために図書館に足を運ぶ人間は明らかに減っている。少し離れたところにあるもう一つの市立図書館よりは調べ物のための来館者が多いはずだが、閲覧室が無人の日はそうでない日よりも明らかに多い。

それでも、データベースでは公開されていない昔の記事に用があったり、或いはインターネットを上手く利用できない世代の利用者

というのはいる。

縮刷版の書架はカウンターの目の前だ。そらはレファレンスカウンターから見える範囲の閲覧席を見渡した。

(……やっぱりいた)

窓際の閲覧席に週に2回ほど縮刷版を読みに来る常連がいた。しかも、この男は一度に読めもしない縮刷版を山のように積み上げるだけでなく、まともに元の位置に戻したこともないという司書課の天敵だった。

——1度に読まないのでしたら、その分だけでも棚に戻して戴けませんか？

以前、課長がそう直談判したことがある、とそらは聞いている。しかし、そのときは男が注意されたことに激昂して大騒ぎになったはずだった。「俺はちゃんと税金を払っているのに、なんで県の施設を自由に使えないんだ!!」と怒鳴り散らしたのだ。

税金を払うことと公共のルールを守らないことに何の関係があるのか、そらにはまったく理解できない。持ち前の正義感がムクムクと頭をもたげ始めていることにそらは気づいた。

「なんでしたら、持ち出されている方に返して戴くように言いましょうか？」

その声音に含まれる憤りを感じたのか、老人は宥めるような柔らかい笑みを浮かべた。

「それには及びませんよ。仕方ない、出直すとしましょう」

老人はそう言っただけで踵を返そうとした。

「ちよつと待ってください!!」

それまで座って応対していたそらがバネ仕掛けの人形のような勢いで立ち上がった。驚いた老人は激しく目を瞬かせた。

「ど、どうされましたかな？」

「あの……縮刷版でなくちゃいけないんですか？」

「……はい？」

「その、ここには書籍の縮刷版だけじゃなくて、マイクロフィルムもあるんです。通常は閉架書庫にあつて、一般の閲覧は受け付けてないんですが。でも、もし——」

そらはそこで言いよんだ。老人の名前を知らなかったからだ。

「ご入用でしたら、出しますけど」

「あ、いや……」老人の顔に困惑の表情が浮かんた。「いや、やはりそれは。貴女だつてお忙しいのに、ご迷惑をかけるわけには——」
「迷惑だなんて、そんな。それがわたしの仕事ですから」

「しかし……」

言葉を探すような短い沈黙をそらは遠慮だと思った。なので、それ以上の議論を打ち切るように微笑んでカウンターから回り出た。ちようと受付に戻ってきた同僚の尾崎さつきに後を頼むと合図を送ると、そらは恐縮する老人を伴つて閉架書庫に向かった。

そらは女性にしては長身で、並んで歩くと2人の身長差はほとんどなかった。どちらも165センチを少し越えた程度だろう。老人は鉄紺色の袴姿の上から漆黒の天鵝絨のインヴァネス・コートを羽織っている。足腰に不自由のある歩き方ではなかったが、黒檀のよな素材で出来た太い杖を手にしていた。ただし、老人の杖には普通の杖にはあるT字型の握りの部分がないため、見た目はやや太目の真つ直ぐな木の棒なのだが。老人がそれを左手に収めて歩く姿を、そらはまるでタイムスリップしてきた三河のお侍さんみたいだなと思つた。

職員しか出入りしない奥まつた一画にある書庫の扉を開けると、唐突に図書館の匂い——或いは古本屋の匂い——としか形容しようのない埃と黴臭さの入り混じつた匂いが鼻をついた。同時に思わず身体が縮み上がるような冷気が吹き付けてくる。

(うつわ、カーディガンくらい着てくればよかった)

そらは声に出さずに呟いた。

市立図書館を中核施設に持つ岡崎市図書館交流プラザは真新しい建物で、館内は空調が行き届いている。だが、それは図書館や同居する市民センターなどの人が出入りするスペースとオフィスだけで、倉庫にまで暖房が入っているはずはなかった。

だが、わざわざ着るために帰るほどのことでもない。そう意を決して、そらは閉架書庫に足を踏み入れた。

広々としたスペースに整然と書架が並ぶ館内とは裏腹に、閉架書庫は古くから営業している古書店のように雑然としている。旧図書館からの引越して持ち込まれた書籍や資料の中には「どうせ公開しないものだから」という理由でダンボールに入れっ放しで“保管”されているものまである。

「ほう、これが図書館の裏側ですか。何と言うか、想像していたとおりですな」

老人は感心したように言った。

そらは適当に「……ええ、蔵書の数が多いですから」とごまかしだが、子供のように興味深そうに辺りを見回す老人の仕草に恥ずかしさを押し殺すのに必死だった。倉庫がゴチャゴチャな理由は単に職員の手が回らないというだけだからだ。

先日、行われた会議では休日に職員総出で整理をするべきだという声も上がった。勿論、公務員が半数以上を占める職場でそんな意見が通るはずもなかったが。

「ええっと、確かこっちのはずなんですが——」

そらは課長が「せめてどこに何があるかの目星くらいつけておこう」と言っ作った見取り図を片手に、スチール製のキャビネットの間を歩いた。

「ああ、ありました。これですね」

目当ての地方紙のマイクロフィルムが見つかった。

マイクロフィルムというと非常に小さなものが想像されることが多い。だが、それはあくまでも言葉からの印象にすぎない。縮刷版でいうところの１ページを１枚のフィルムに収めるのだが、それでも単純計算で月にして１４８８ページ——朝刊３２ページ、夕刊１６ページで３１日分——にも及ぶ。

従って、そのケースはそれなりの大きさになる。そらが捜していた地方紙のフィルムも百科事典ほどの分厚さのケースに収められていた。それが棚の最上段にかなり力任せに押し込んである。

そらは踏み台を持ってきてケースに手を掛けた。しかし、引っ張り出そうとして「あれっ？」と素っ頓狂な声をあげる。

「どうされましたかな？」

「い、いえ。引っ掛かってるんですかね……」

引っ掛かってるわけではなかった。無理やり押し込んであるのと、湿気のせいでケース同士が貼り付いているのだ。

それでも何度か押ししたり引いたりしているうちに動くようになってきた。学生時代は陸上選手で身体は鍛えていたし、今は夫の実家の農作業を手伝いに行く関係で、そのスレンダーな体格とは裏腹にそらの腕力はそれなりのものだった。さらに前後に揺すっているうちに張り付いていたケース同士が剥がれる手ごたえを感じた。

「よっし、せーのっ——」

そらは殊更大きな掛け声をかけた。——その刹那。

「危ないッ！！」

老人の声がそらの耳をつんざいた。

何が起こったか分からないまま、そらは床に薙ぎ倒されていた。

それと同時にドスンという重い音が立て続けにした。

「……えっ？」

プラスチックタイルの感触がそらの背中と尻に冷気を伝えてくる。自分が立っている状態から、今は横になって倒れていることは理解できたが、その割には床に叩きつけられたような痛みはほとんどなかった。代わりにあったのは力強い腕に抱き寄せられている感触だ。

った。

そらは反射的に固く瞑っていた瞼を開いた。最初に目に入っただのは自分の身体に覆い被さるインヴァネス・コートの黒い生地だった。「大丈夫ですか？」

錆を含んだ声がそらの耳朵を打った。

そらはようやく何が起こったのかを理解した。力任せにケースを動かしたせいでキャビネットが揺れて、上に乗っていた段ボールが落ちてきたのだ。この老人が身体ごとぶつかって自分を押し退けてくれなかったら、そらは頭のとっぺんでそれを受け止める羽目になっていたところだった。

老人は身体を起こしてそらをゆっくりと抱き起こした。

「す、すいません！！ あん……お怪我は？」

「私は何も。貴女は？」

そらは自分の身体を点検した。固い床に押し倒されたので背中や尻に少しくらい打ち身があるかもしれないが、それは怪我のうちには入らないだろう。

「大丈夫みたいです。結構クッション効いてるんで」

そらは尻をさすりながら言った。ずれた眼鏡を慌てて戻すと自然と照れ笑いが浮かぶ。

老人はそんなそらをじつと見つめていたが、やがて、皺の間に消えてしまうほど優しく目を細めて「それはよかった」と言った。

出会い 2

大きな物音は受付の奥にある司書課の部屋にまで轟いていた。

「——えっ、なににッ!？」

そらが閉架書庫に行ったことを知っていた同僚の尾崎さつきは、閲覧室の扉を蹴破らんばかりの勢いで書庫に駆け込んできた。普段は淑やかなタイプだが、動転したときや体調が悪いときなどは被っている特大の猫の効果が薄れるのか、こうやって地が出てしまうことがある。そらはその落差を見るたびに「コイツはぜったい二重人格だ」と確信してしまう。

「大騒ぎしないでよ。棚の上の荷物が落ちてきただけなんだから」

「だけって……あんた、怪我は？」

「してないよ。このひとが助けてくださったから——」

そらはまたしても言いよんだ。老人の名前をまだ訊いていなかったからだ。

老人の方を振り返ったそらは目を丸くした。

「ちよつと、大丈夫ですか!？」

起き上がって服の埃を払っている間は何でもないような顔をしていたのに、老人は左の手首を押さえて顔をしかめていた。身体に似合わない大きな手が押さえている辺りがサツマイモのような紫に変色している。

「どうしたんですか？」

「どうやら、身体を支えようとしたときに床に手をついてしまったらしい。捻挫だと思うんですが……」

「骨が折れてるんじゃないんですか!？」

「いや、それはなさそうです。それでも怪我には慣れていてね」

「なに呑気なこと言ってるんですか、そんなに内出血してるじゃない

いですか！！」

呻き声に似た苦しげな響きはあったが、老人は事もなさそうな口調を崩さなかった。左手の指を曲げ伸ばししているのは骨や靱帯に異常がないことを確かめる仕草だった。

すっかり動転してしまつたそらに代わつて、さつきが内線電話で上司に事情を説明した。すぐに救急車を呼ぶというので、そらと老人の2人はエントランスへ急いだ。

「すみません、却つてご迷惑をおかけして」

「そんな、迷惑だなんて。わたしのほうこそ助けていただいたのに、こんなことに……」

このひとが助けてくれなければ、病院に運ばれたのは自分だったかもしれない。

そらはゾツとする思いを抑えられないでいた。落ちてきた段ボールには頑丈なプラスチックケースに収められた古い8ミリフィルムがぎつしり詰まつていて、重さは軽く10キロを越えていた。脳天を直撃していたらタンコブ程度では済まなかっただろう。良くて脳震盪、最悪の場合は命に関わつた可能性すらある。

整形外科への車中は互いに自分の非を認めあう不毛なやりとりか、そうでなければ気まずい沈黙に支配されていた。

診察の結果は全治2週間の捻挫だった。幸いにも骨や靱帯に損傷はなく、内出血もすぐに収まるだろうとのことだった。それを聞いて、そらはようやくホツと胸を撫で下ろした。

それでもしばらくは動かさないほうがいいということで、老人はギプスで固定された左前腕を三角巾で吊つた格好で診察室から出てきた。和服の上からなので窮屈に見えたが、袖の無いインヴァネス・コートはこういうとき、そのまま肩から羽織れて便利だと老人は笑った。

診察代の精算が終わるまでの間、老人とそらは待合室の長椅子に並んで座っていた。館内での事故なので治療費は図書館側で負担すると課長から言われていたが、そらは自分で払うつもりだったので、

愛用のフェンディの財布を握り締めたままだった。

何か話しかけなきゃ、とそらは思った。しかし、話題は思い浮かばなかった。本当は興味を覚えていることが一つある。ただ、それを訊いていいのかどうか、そらには判断がつかなかった。

なので、他のことを訊いてみることにした。

「段ボールが落つこちてきたとき、草薙さん、わたしの近くにはいらっしやいませんか？」

草薙というのは老人の苗字だった。下の名前は伊織。左利きだというので病院の受付はそらがしていた。「なぎ」の字は危うくタレントと同じ字を書きそうになったのだが、草薙がさりげなく保険証を目の前に滑らせたおかげでそらは恥をかかずに済んでいた。

草薙は少し怪訝そうな顔をした。

「そうでしたかな？」

「はい。そうだから、棚の上でモノが揺れてるのにも気づかれたんでしょう？」

はつきり見ていたわけではなかったが、自分が草薙を入口辺りに残してさっさと書庫内を見回っていたことをそらは覚えている。貼りついたケースと悪戦苦闘していたときにかけられた声もそんなに近くからではなかったはずだ。傍から声をかけられたのなら逆に驚いただろうから、それは間違いない。

「そういうことになりますな。それが？」

「いえ、それなのによく落ちてくるのに間に合ったなって思ってた。奥歯に加速装置のスイッチがあれば話は別だけど、とバカバカしい考えがそらの脳裏をよぎった。

「あれですか。あのとき、私はちょうど棚の曲がり角辺りにいた。あなたとの距離はそう……2間半ほどでしたか」

「……？」

そらは首を傾げた。間けんという単位が分からなかったからだ。

「お若い方には通じませんか」

「そんなに若くないですけど……。すみません、不勉強で」

草薙は苦笑いを浮かべただけでその卑下をやり過ごした。

「一間はおよそ1・8メートル。畳の長辺とほぼ同じ長さです。ですから、あのときは5メートルほど先だったことになりますか」

そらは待合室の床を見た。

プラスチックタイルの1辺はおよそ30センチ。部屋の面積を手取り早く計算するときの基準になる、と損保関係の仕事をする夫から教えてもらったことがある。それによれば2間半先は単純計算でタイル15、6枚も向こうだった。そらにはそれが途轍もなく遠くに見えた。

「剣道の試合だとそれくらいの距離を詰めるのは……私はあまりやりませんが、遠間からの飛び込み面だと1呼吸半といったところですよ。一方、落ちてきた荷物ですが、あのときのタイミングだと落ちてくるのに2呼吸かかる。ですから、ギリギリで間に合うと判断したわけです。まあ、実際にはそこまで冷静な計算をする余裕はなく、ただ、危ないと思った瞬間に身体が動いていたというだけなのです」

「はあ……」

そらは嘆息した。

理屈は分かる。しかし、それは結局のところ、わずか半呼吸分のタイムラグに賭けたギャンブルだったわけだ。それを目の前の小柄で瘦身の老人が成し遂げ、あまつさえ、体格だけならほぼ同等の自分を押し倒し、しかもその身体が床に叩きつけられないように腕を挺して庇ったのだという事実にはただ驚くしかなかった。

支払いを終えて、2人は病院のエントランスを出た。

外はすでに日が暮れ始めていた。内陸部で山が多いこの街の2月ほとんどもなく寒い。寒風というより冷気の塊が押し寄せてきているような気がする。ひときわ身がすくむような突風を首をすくめてやりすごして、そらはタクシー乗り場まで草薙を送った。

「そつえば草薙さん、お杖は？」

「杖？」

「ええ。ほら、ずっと左手にお持ちだったじゃないですか」

草薙はそれに今気づいたというようにキョトンとした顔をしていた。

「これは失敬。あの部屋に忘れてきたようすな」

「でしたら、それも後でお届けしますね。草薙さんのお車も御宅まで運ばなくちゃいけませんし——」

そらは草薙の治療中に上司とかわした電話の内容を思い出した。

「——そらさあん、あれはマズいよお」

課長の声は誰かに聞かれるのを怖れるようなヒソヒソしたものだった。この男は正規職員の女性はちゃんと苗字で呼ぶが、そらのように囑託契約の職員は馴れ馴れしく名前で呼ぶ。広義ではそれもセクハラになり得るのだが、実害と言えるほどのことはないので放置しているのが実際だ。

「何がですか？」

「草薙氏の車だよ。ほら、君が家まで運んでいってくれと言っただろ？」

実は救急車を待っている間、草薙は病院が近くなら自分の車で行くこうとそらに提案していた。自分で運転できる状態ではないのでそらに運転を頼めれば、とのことだったのだが、そらはペーパードライバーなので無理だと断わっていた。

「お願いしましたけど。それが何か？」

「アストンマーチンなんか、怖くて誰も運転できないよ」

「アストン………なんですって？」

そらの声が怪訝そうにひそまった。

「アストンマーチンDB5。007のサンダーボール作戦に出たボンド・カーだってさ。知ってる？」

昔の007など見ていないがサンダーボール作戦がショーン・コネリー時代の作品であることはそらでも知っていた。だとすれば、

かなり昔の車ということになる。

「それ、高いんですか？」

「詳しいことは分かんないけど、フェラーリを買ってもお釣りがくるって話だね。とにかく、そんなの運転していつてぶつけでもしたら大変だよ」

「なるほど」

（それは誰も乗りたがらないだろうなあ）

しかし、責任を取って自分が運ぶわけにもいかない。そんなことをしたが最後、目的地に着いたときにアストンマーチンとやらが車の形をしているかどうか、まったく保証できないからだ。

そらは知り合いの自動車屋に相談することにした。母親が経営しておる小料理屋の常連に外車の輸入販売を手がけている男がいるのだ。そこならば外車の運転に慣れたスタッフがいるだろうし、うまくいけば荷台に乗せて運ぶトラックを貸してくれるかもしれない。

こつちで何とかします、とそらが宣言すると、課長は小心者らしいあからさまな安堵の溜め息を洩らした。全ての元凶はそら自身なので文句は言えないが、こんな上司の下で働いていることに幾らかの落胆を覚えずにいらなかった。

そらは母親の携帯電話を鳴らした。用件を伝えると母親は「あんだ、なにやってんの？」とブツブツ文句を言いながらも件の自動車屋に連絡をとってくれることになった。

「後でちゃんと事情を説明しなさいよ」

「はいはい」

「返事は一回」

母親はいつものようにそらを子供扱いしながら電話を切った。言い返したいことは山ほどあるが、残念ながら今回の件については何も言える材料はなかった。そらは携帯電話のマイクに向かって盛大な溜め息を送り込んだ。

自分の知らないところでそんな会話がなされていたなど知る由もなく、草薙は遠慮がちな笑みを浮かべた。

「そんなにお気遣い戴くほどのこともないのですがね。この腕ではしばらくは車も運転できませんし、例の棒を振ることもできません——いや、そういうつもりで言ったではありませんが」

その表情が一気に曇ったのを見て、草薙は右手を小さく掲げてパタパタと振った。

その子供じみた仕草はほんの少しではあったがその心を和ませた。罪悪感は一向に薄れる気配はなかったが、それを表に出すのは却って老人の負担になる。それに気づかないほどそらは子供ではなかった。

「あれって杖じゃないんですか？」

杖らしくないとは思っていたが、草薙の言葉の端々に剣道の用語が出てくることにそらはある種の確信を持ち始めていた。

「——杖ですよ。表向きはね。しかし、実際は護身用の木刀です。小判型になってますので、何度か警察に注意されたことがあります」

小判型の意味が分からないそらに、草薙は木刀の断面のことだと説明した。

普通の杖の断面は正円形をしている。しかし木刀は日本刀を模したもののため、その断面も楕円形に近い形をしている。黒檀の木の棒を持ち歩く老人を見つけた警察にしてみれば、それが杖であるか木刀であるかは大きな違いというわけだ。

ちなみに本物の刀のように反った形をしていないことはあまり言い訳の材料にならない、と草薙は付け加えた。流派によっては直刀を使うところがあるし、それでなくても鍛錬用に振る棒は真っ直ぐなものが多いからだ。第一、剣道で使う竹刀は真っ直ぐで刀のように反ってはいない。

「年甲斐もないと言われることもあります、何と申しますか、あれを持っていただけで安心するのですよ。まあ、それでも最近は何と物騒ですから。アレは何と言いましたかな。オヤジ——」

「オヤジ狩りのことですか？」

「そうそう。私に言わせれば、あっけなく狩られるほうにも問題があるような気がします、しかし、この平和な時代にあんな愚連隊のような連中を相手にする術を、世の中の誰にも身につけておけないのは無理な話なのでしょう」

「そうですね」

そらにしてみても、今の若者が自堕落で世の中を舐めきっているのは大人がだらしくなったのが原因だと思わないではない。しかし、草薙が言うような、あるいは実践しているような誰もが自分の身は自分で守れる世の中というのもあまり現実的ではないだろうし、それはそれで暴力のエスカレーターを招くだけのような気もした。

乗り場に空車のタクシーが入ってきて、草薙はその後部座席に乗り込んだ。

「それじゃ、お車と杖は後でご自宅にお届けしますね。と言っても、運転するのはわたしじゃありませんけど」

「樋口さんは運転はまったくですか？」

「さつきも言いましたけど、完全なペーパードライバーなんです。夫が運転させてくれないんで。少し前に九州までドライブしたんですけど、最初のパーキングエリアで交替させられました」

「ほう？」

草薙は可笑しそうに目を細めた。そのからかうような視線にそれは軽く頬を膨らませたが、やがてそれは照れ笑いに変わった。

「それではまた後日。今度は縮刷版が見られると良いのですがね」

「来られる日をご連絡ください。お取り置きしておきますから」

「そんなサービスがあるんですか？」

「草薙さんだけの特別サービスです。——それじゃあ、お大事に」
「ありがとうございます。では、また」

草薙はそう言っ、行先を告げるために運転手に向き直った。

手にしていた木刀と同じように真っ直ぐで厳めしく、それでいて物静かな印象も与える不思議な横顔にそらはしばらく見入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7187y/>

熾火

2011年11月21日03時11分発行